

東洋學報 第拾六卷第四號

昭和二年十二月

干支の起原に就いて(上)

飯島忠夫

目次

- 一 序論
- 二 干支の起原に關する傳説
- 三 五行説の由來
- 四 干支製作の目的
- 五 十干の意義
- 六 十二支の意義
- 七 干支の意義に關する異説の批判
- 八 十二支と動物
- 九 五行説成立の年代と干支の起原
- 十 殷虛文字の批判

干支の起原に就いて

一 序 論

年月日時及び方角にそれぞれ十干十二支を附けて呼ぶことは支那を中心とした東洋の諸國に於て古代から行はれた習慣である。支那上古史の年代を論ずるに當つてはそれが重要な題目の一である。此の十干十二支が如何なる目的から發生したか、又如何なる意義を含んで居るか、又其れが如何なる時代に於て考案せられたものであるかは充分なる研究を要する。此の問題が解決せられれば、支那の上古に於ける文化の性質と其の發達の歴史とに大なる光明を投じ、上古史の年代の批判に大なる根據を與へることゝなるべきものである。

二 干支の起原に關する傳説

干支の作者は傳説によれば、黃帝の師なる大撓である。呂氏春秋の審分覽に「大撓作甲子」とあり、其の孟夏紀に「黃帝師大撓」とあるのが其の出典である。世本にもまた「大撓作甲子」とあり、漢書律歷志には「黃帝使大撓作甲子」とある。後漢の蔡邕の月令章句には「大撓探五行之情。占斗綱所建。於是始作甲乙以名日。謂之幹。作子丑以名月。謂之枝。枝幹相配。以成六句」と記し、後漢の班固の白虎通（姓名の條）には「甲乙者幹也。子丑者枝也」と記し、又魏の張揖の廣雅には「甲乙爲幹。幹者日之神也。寅卯爲枝。枝者月之靈也」と記してある。此等によれば、干支は即ち幹と枝

とであつて、それを干支と記すのは字形の省略されたのである。又此の文に見えて居る「斗綱所建」とは北斗の柄の指す方向のことである。されば蔡邕の傳へる所では干支の成立には五行の智識と北斗の觀測に關する智識とが豫想されて居るのである。そして又此等の智識は黄帝の時代に於て既に存在して居たものとして居るのである。天文曆數に關する智識が黄帝の時代に創始されたことは、早く史記の曆書に、

蓋黄帝考定星曆、建立五行、起消息、正閏餘、流布本には黄帝を皇帝に作つて居る。宋の淳熙の耿秉の刊本、元の中統の刊本、明の萬曆の南京國子監刊本等には黄帝とある。多くの註釋家の説でも皇帝は黄帝とすべきものとして居る。）

と見えて居て、これが史記以前から傳はつたところの傳説と認められるのである。干支が天文の智識と五行の智識との應用であるといふ蔡邕の記載と、黄帝の時の人なる大撓が甲子を作つたといふ傳説とは、此の曆書の記載と其の步調を同一にして居るものである。然るときは干支と五行と天文とは離るべからざる關係を有するものでなければならぬ。少くとも古傳説の成立した時に於ては其様に認められて居たのである。

黄帝の年代には種々の説が有る。後世の普通の説では黄帝の即位を西紀前二六九八に置いてあるが、これは宋代に於て通鑑の編纂せられた時に始めて採用したものであつて、何等の確實なる根據を有するものではない。漢書律曆志には二個の説が記してあつて、一は黄帝より以來前漢の元鳳三年(B. C. 77)まで六千餘歳を経て居るとあり、一は同じく三千六百

二十九歳を経て居るとある。此等は皆曆術を應用して上古に溯つて逆算を試みたものである。司馬遷は史記の三代世表の序に、

余讀諫記黃帝以來。皆有年數。稽其歷譜。終始五德之傳。古文咸不同乖異。夫子之弗論。次其年月。豈虛哉。

と論じて、孔子が上古の年代を説かなかつたことを賛し、自身も周の中世なる共和より以前の年代に就いては全然それを信用しない所の態度を取つて居る。然るときは、黃帝の年代は結局不明瞭と云ふより外は無いのである。

漢書律歷志の世經によれば、黃帝軒轅氏の以前には太昊伏羲氏、炎帝神農氏があり、其以後には少昊金天氏、顓頊高陽氏がある。これらは禮記の月令や、呂氏春秋や、淮南子に見えて居る五行の帝、即ち五行が神格化せられたところの太昊、炎帝、黃帝、少昊、顓頊と相照應するものである。此等は五行の木火土金水をそれ／＼代表するもので、木火土金水に五色を配するときは青赤黃白黒となる。土の色には黃を當てゝあるから、五行の帝としての「黃帝」は土の神格を其色について呼んだものと考へられる。上古に於て天文曆數の智識を創設した君主が同じく黃帝であつて、其前後に列る君主もまた五行の神格と同一の名を帯びて居るといふことは、上古の君主に關する傳説が五行説の影響によつて成立つて居ることを示すものでなければならぬ。

戰國の中世に出た騶衍は恐らく黃帝を以て最古の君主として説いた學者の最初のもの

であらう。史記の孟子荀卿列傳の中に騶衍を叙した條に、

先序今以上至黃帝。學者所共術。大竝世盛衰。因載其祿祥度制。

とあるのは其の證とすべきである。此時にはまだ世經の様に太昊から始めて炎帝黃帝の順序を取る説が成立つて居なかつたのである。此の學者は又陰陽家即ち占星家の中興の祖と見るべき人であつて、陰陽の消息と五行の相勝との理論を本として、歷朝の交代を説明して居る。此の如き態度を取る學者が最古の君主として黃帝を取り出したのは、また黃帝と五行説とが密接なる關係の有ることを示すものでなければならぬ。然るときは五行説の由來を明瞭にするといふことが、黃帝傳説の起原を尋ね、從つてまた干支の製作の目的と其の意義とを明にし、且つ其の成立の年代を決定するに關して最も必要なるものとなるのである。

三 五行説の由來

史記の天官書にある次の文は五行説の由來を研究するについて第一に注意すべきものである。

太史公曰。中略。仰則觀象於天。俯則法類於地。天則有日月。地則有陰陽。天有五星。地有五行。天則有列宿。地則有州域。三光者陰陽之精。氣本在地。而聖人統理之。

又淮南子の精神訓には「天有五行」とあり、董仲舒の春秋繁露にも亦「天有五行」とある。さて五

行の「行」が歩行、流行、運行の意義を有して居ることは、其の傳來の字音が戸庚切 (Hsing) の下平聲であることによつて明である。「行」の字音は其の他に二種が有つて、Hsing の去聲に呼ぶものは行迹の意義であり、hang の下平聲に呼ぶものは行列の意義であるが、此等は五行の「行」に當るものではない。されば、五行は五運五步など、同義であるべきものである。漢書の律歴志には、五星のことを明に五步と呼び、又其細目に於ては單に木火土金水と稱して、木星、火星、土星、金星、水星とは呼ばない。此等の惑星の名としては、此頃にはまだ歳星、熒惑、鎮星、太白、辰星が用ひられた。木星、火星など、星の字を附けて呼ぶのは尙後代から始まつたのである。それは晋書天文志から見えて來る。史記の天官書の文について考へれば、陰陽五行は定形の無いもので、日月五星は定形の有るものである。日月五星は畢竟陰陽五行の精の天上に凝り積つて居るものである。然るときは精神訓及び春秋繁露にあるところの「天有五行」といふことも、決して天官書にある「地有五行」といふこと、矛盾すべきものではない。結局天地の間に五行は遍滿して居るので、その精が凝つて天に現はれて歩行し運行して居るのを特に五步又は五星と呼ぶものと見ればよい。黃帝内經素問に五運とあるのも亦運行の意義を取つたものであることは言ふまでもない。

五行はまた五常、五氣とも呼ばれる。五常とは恒常不變なる方面から名づけたもので、五氣とは精妙なる物質としての方面から名づけたものであると思はれる。それ故に、五常、五氣は其の元素的方面に名づけたものであつて、五行、五運、五步が其の活動的方面に名づけて

あるのに對立するものと考へられる。しかし實際に於ては此の兩方面の語は必ずしも嚴密に區別されては居らぬ。

淮南子天文訓の冒頭の文は支那古代の宇宙生成論を詳細に記述して居るものである。それは宇宙の本原を渾沌無形の一元の氣とし、それが二つに分れて天と地と爲り、天の氣は陽で、地の氣は陰であり、陽の精の凝り積つたものが日と爲り、陰の精の凝り積つたものが月となつて天上に運行し、日月から溢れ出た精が更に種々の配合を成して、五星即ち五個の惑星となり、又無數の恒星ともなつたとするものである。そして五星といふ通名の下に、すべての五行の配當を叙述してある。

望遠鏡の發明されない以前に於ては五個の惑星が惑星の全部であつた。それ故に日月の運行に續いては、一定不變の排列をして居る恒星に對して、變幻極なき移動を爲し、光度も亦大なる所の五星の運行が特に注意されたのは、當然の事と言はねばならぬ。萬種萬様な物體の組織や、變化無窮なる天界地界人界の現象を、微細な點に入つて説明しようとするときは、元素と其の離合集散との考が成立つて來る。其等の元素を此の五星と關係させて考へるときは、五星を以て其等の元素の凝聚したものと見、其の光度の變化、運行の状態、及び其の相互の間の離合集散が萬物の發生や滅亡の現象を支配するものとしたのも、強ち無理なことではない。元素の數を五個と定めて、五行説を成立させたのは大體此の如き徑路に由つたのであらう。

元素の觀念が生じた時、水と火とは第一に其の選に入るべきものである。土も空氣も亦注意を免れることは出来ない。金屬も亦之に次ぎて注意されるべきものである。木が引出されたのは、そこに生命の躍動が最も強く現はれて居る故であらう。五行の中に木が有るといふことは、支那上古の元素の觀念が單に生命を有せざる物質を指して居るものでないことを證明する。元素としての五行は寧ろ其の活力の種類を分別したものと考へるべきである。生命と物質とは、五行説に於ては、同一物の兩面として考へられて居たのである。空氣即ち風が五行の中に入れられなかつたのは、實は入れられなかつたのでなく、それは「氣」の中に包括せられて、見るべき色と形とを有する五行の上に立つところの、色なく形なき一層本原的なるものとして別に取扱はれたのであらう。木火土金水を五星に配合する方法は、其等の色に因んだことゝ考へられる。木星の色が青に近く、火星の色が赤に近く、土星の色が黄に近く、金星の色が白に近く、水星の色が灰黒色に近いことは、其れを證明するものである。

五行説は宇宙生成の理論であつて、それは天文學と離れないものである。天文曆數の智識と没交渉と認むべき五行説は支那の古典の中に全然存在しない。天文曆數と交渉ある五行説は即ち五星の智識を豫想するものに外ならない。伏羲の傳説には仰ぎて天象を觀ることがあり、黃帝の傳説には星曆と五行とが提携して居り、堯舜禹の傳説には日月星辰を曆象することゝ五行を陳ずることゝ併立して居る。禹が有扈氏を討伐したのは、五行を

威侮し三正を怠棄した罪を正したのである。殷の箕子が周の武王に傳へた洪範には五行が第一に記され、歳、月、日、星辰、曆數が五紀と名づけて重んぜられて居る。古典は悉く此の如き勞圍氣の中に在る。五行説は陰陽説と共に支那最古の哲學である。五行説は天文曆數と提携して、古代思想の劈頭から其の勢力を恣にして居たのである。

四 干支製作の目的

蔡邕の月令章句に、大撓探五行之情。占斗綱所建。於是始作甲乙以命日。謂之幹。作子丑以名月。謂之枝。枝幹相配。以成六旬。とあるのは、後漢時代の學者が干支の成立及び其の使用の目的に就いて有して居た智識を代表するものと見られる。それは甲乙等の十干をば、十日を一の週期と立て、それに五行説を適用して名づけたものとし、子丑等の十二支をば、十二月を一の週期と立て、北斗の柄が月毎に移動して指示する方向に名づけたものとして居るのである。(此の北斗の柄の指す方向を觀測する時刻には、日が暮れて始めて星が見える時、即ち初昏の時刻を用ひて居た。) 日を幹とし月を枝としたことから考へれば、甲乙は主であり子丑は従であるとしたのである。然るときは後漢の學者は干支の組織に於て五行説が主となつて居ることを認めて居たものである。

甲乙を干とし子丑を支としたのは後漢の班固の白虎通に始めて見える。班固は後漢の初の人である。前漢の時代にはまだ干支といふ語が無い。

甲乙等の十名、子丑等の十二名が十干十二支と呼ばれる以前には、十母十二子(史記律書と呼ばれた)とあり、更に派つては、十日十二辰と呼ばれて居たのである。それは淮南子の天文訓に、「十日十二辰、周六十日」とあり、周禮の春官馮相氏に、「十有二辰、十日」とあるのによつて知られる。此の十日十二辰といふのが甲乙子丑等の最も古い名稱である。

十干は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸であり、十二支は子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥である。此の十個と十二個とを組合せたものが、甲子、乙丑、丙寅、丁卯、戊辰等の六十種の名稱となる。六十は即ち十と十二との最小公倍数である。それが、年、月、日、時及び方位に附せられて、其の順序と週期とを示す用に供せられる。此等は皆六十の週期を有するものとして取扱はれる。但し時刻にはもとは單に十二支だけを附けてあつた。

年の干支は、上古の文献では、其の異名を以て記されて居た。月の干支にも異名が有つた。時刻にも異名が有つた。日の干支だけには異名が無い。今、爾雅に據つて此等の異名を表に作れば、次の如くである。

年 (史記)		月	
甲	闕 (焉逢)	畢	戊
乙	旃 (端蒙)	橘	己
丙	柔 (游兆)	修	庚
丁	強 (疆梧)	圉	辛
			重
			光 (昭陽)
			塞
			卯
			單
			闕
			如
年 (史記)		月	
壬	亥	闕	癸
癸	甲	單	甲
甲	乙	闕	乙
乙	丙	單	丙
丙	丁	闕	丁
丁	戊	單	戊
戊	己	闕	己
己	庚	單	庚
庚	辛	闕	辛
辛	壬	單	壬
壬	癸	闕	癸

辰	執・徐	病	申	涪	灘	相	子	困	敦	辜
巳	大荒落	余	酉	作	噩	壯	丑	赤奮若	塗	
午	敦	牂	戌	闕	茂	立				
未	協	洽	亥	大淵猷		陽				

淮南子にある年の異名は爾雅と同じく、史記のものは十干の方に頗る異同が有る。又此等の書に、十二支をば皆寅を始として記載してあることは注意すべきものである。年の干支が日と同じ名稱で記されて居るのは淮南子に、其の著者淮南王劉安の元年が丙子に當ると見えて居るのが其初である。月の稱呼は干支を用ひずして正月二月等とするのが古來からの普通の方法であつて、異名を用ひるのは、屈原の離騷に正月を孟陬と記し、國語に九月を玄月と記して居るのが其初である。又時刻の異名は次の如く配當される。(之に十二支と方位との配當をも附記する。)

子	夜半	正北	辰	食時	申	晡時
丑	雞鳴		巳	隅中	酉	日入
寅	平旦		午	日中	正南	正西
卯	日出	正東	未	日昃	亥	人定

これは稍後世のものであつて、淮南子に見えるものは多少異つて居る。又時刻を本名で呼ぶことは史記の歴書に始めて見える。

干支の起原に就いて

此等の年及び月の異名は一種の特色を有し、隱語的の性質を具へて居るので、或は之を外國傳來の語ではないかと疑ふものもある。しかし漢魏の注釋家はこれを支那語を以て説明し、干支の本名と其意義相通するものとする。歐洲の學者でも Laouperie の如きは十干の異名をアッカチアの數名に、十二支の異名をバビロンの月名に比較して居るが、それは満足の結果を得て居ない。清の趙翼の陔餘叢考には此異名と普通の名とを以て其の使用の目的及び其の語の意義が同一なものとして居る。自分は此の説に賛成する。其の文は次の如くである。

蓋干支之義。所該者廣。甲子與攝提格之類。字雖異而義本同。古人惟恐年月日時易混。故分別紀之。後世趨於便易。故年月日時。概以甲子紀。其實一也。

干支の名稱は、古來の傳承の説によれば、陰陽消長、五行推移の順序を示して居るもので、古代に於ては、此の如き天地の活動狀態の變動遷移は直に人間社會に影響して、其の吉凶禍福を支配するものと考へられて居た。(此の思想の基礎は現今の科學と異ならない。現今の科學でも、太陽の黑點の週期は人事の吉凶禍福に關係あるものとして、熱心に議論されて居るではないか。)それ故に、各の年、各の月、各の日、各の時に對する此の干支の配當は、其の間に起るべき吉凶禍福の性質を豫知するの用を爲すものであつた。換言すれば、干支は占星術上の目的の爲に製作されたものであつて、干支の使用された古代の社會には占星術が既に成立して居たのである。世界の諸國に於ける上古の天文學はすべて占星術として其の發

達を始めたものである。若し干支本來の目的はただ年月日時に順序の番號を附する爲であつて、占星術的意義は後に附加されたものと考へる人が有るならば、それは天文學發達の歴史を顧みないものと言はねばならぬ。

五 十干の意義

十干即ち十日については、淮南子の天文訓の五星の條に、「東方木也。其日甲乙。南方火也。其日丙丁。中央土也。其日戊己。西方金也。其日庚辛。北方水也。其日壬癸」とあり、又「凡日甲剛乙柔。丙剛丁柔。以至於癸」とある。剛と柔とは即ち陽と陰とに對比すべきものであることは、易に「立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰剛與柔」とあるによつても察することが出来る。これを表に作れば、次の如き關係となる。

甲	剛	木	丙	剛	火	戊	剛	土	庚	剛	金	壬	剛	水
乙	柔		丁	柔		己	柔		辛	柔		癸	柔	

我國の譯語に、甲乙を「きのえ」「きの」と、丙丁を「ひのえ」「ひのと」、戊己を「つちのえ」「つちのと」、庚辛を「かのえ」「かの」と、壬癸を「みづのえ」「みづのと」といふのは、木の兄、木の弟、火の兄、火の弟、土の兄、土の弟、金の兄、金の弟、水の兄、水の弟の意であつて、兄弟は即ち剛柔の意を含んで居るのである。

五行の順序には三種の區別が有る。第一は五行の生成する順序で、水、火、木、金、土であり、第

二は五行の相生ずる順序で、木から火を生じ、火から土を生じ、土から金を生じ、金から水を生じ、水から更に木を生ずるといふことによつて、木火土金水とするのであり、第三は五行の相勝の順序で、木が土に勝ち、土が水に勝ち、水が火に勝ち、火が金に勝ち、金が木に勝つといふことによつて、土木金火水とするのである。そして十日の順序は第二の相生の順序に依つて居る。相生の順序は春夏秋冬、東南西北、朝晝夕夜等の順序に配比せられるもので、其の中に萬物の發生、繁茂、成熟、伏藏の過程を含んで居る。されば、十日の週期は五行相生の順序によつて、陰陽消長の小循環を示して居るものである。蔡邕が「探五行之情以甲乙名日」と言つて居るのは此事を指したものと解せられる。

十進法によつて物を數へるのは必ずしも五行説の如き哲學の成立を待たない。それは極めて原始的のものである。十日の週期を立てるのも此の原始的な十進法によつて日を數へたことに本づいて居るものと考へて差支がないやうである。しかしそれに附した甲乙等の名稱は必ずしも原始的のものではない。其言語と文字とは五行説の香氣が漂つて居るのである。

十干の語原的解釋の今に傳はつて居る中で、最も古いものは史記の律書に在る。これは上古からの傳統を有して居るものと推測されるから、今之を本として研究を試みることにする。(必要な場合には今の北京音を附して置くが、これは勿論大體の傾向を示すだけである。それは古代から現今までの間に既に多くの變遷を経て居るのである。文字に音標的

部分を有するものは、其の文字が示す語の音と音標的部分の音とが造字の時に於て同一又は近似のものであつたと見ても大なる誤は無い。

甲(chia)者言萬物割符甲而出也。

「符甲」は説文釋名などの書に「孚甲」と記してあつて、發音の同一であることから生じた假借である。「孚」は卵の殻であり、又草木の實を被ふ厚皮で、穀殼の類である。「甲」もまた厚皮である。草木や卵生のものが發生する時は厚皮や卵殻を破つて出るのである。此の解釋に由るときは、十干の「甲」の語原は即ち「孚甲」の「甲」であつて、それで萬物發生の始を指示して居るのである。五行の「木」は發生の力を象徴して居るものであるから、十干の「甲」にもまた五行の「木」の性質が附與されて居るものと考へなければならぬ。後漢の劉熙の釋名は語原的解釋を集めた一種の辭書であるが、それには「甲、孚也。萬物解孚甲而出也」とあつて、史記の外には出て居ない。故に此の解釋は古代に於て唯一のものであつて、また極めて妥當のものであることが知られる。「甲」を「始」の意義に用ひた例は、書經の多方の篇に「甲子内亂」が有る。

乙(乙)者言萬物生軋軋(Ya)也。

「軋」は「きしる」と訓ずる語で、こゝでは草木の發生するとき其の幼芽の尙屈曲して居て充分に伸長し得ない状態を形容して居るのである。「軋」の字の音標的部分は「し」であつて、それは「乙」の字が「車」の字と結合された場合に生じた一種の書法である。此の史記の解釋では「乙」と「軋」とが其の意義に於て連絡して居るものと認めたとである。釋名にもまた「乙、軋也。自抽軋

而出也」とあつて、史記の範圍からは出て居ない。これは「甲」と相並んで、萬物の發生する状態を示して居るものであつて、幼芽が皮殻を破つて出ることと、それがまだ屈曲して居ることとは、自ら剛柔の關係を成して、五行の木の作用は「甲」と「乙」との語の中に充分に象徴されて居るものと認められるのである。

丙 (ping³) 者言陽道著明。

これは釋名には「丙炳 (ping³) 也。物生炳然皆著見也」とあつて、釋名の方が史記の説を充分に發揮して居るものである。「炳は説文では「明也」と訓じ、廣雅にも「炳炳明也」とあつて、「あきらか」といふことである。此字に火扁の有るのは火光の明なるに因んだのであらう。されば「丙」の語原は「炳」であつて、其の意義は「あきらか」といふことであり、其の字形は「炳」の字の火扁を省略したものと見做すことが出来るのである。釋名に云ふところの、萬物の發生して炳然として顯はれるといふことは、正に萬物繁盛の状態である。それが火に緣故のある「丙」によつて示されて居るといふことは、又五行の「火」と「丙」なる語との間に離るべからざる關係の存することを證するものでなければならぬ。此の解釋にも別に牽強附會と認むべきものはない。

丁 (ting¹) 者言萬物之丁壯也。

これは釋名には「丁壯也。物皆丁壯也」としてあつて、「壯」を以て「丁」の語原を解して居る。「丁」が「壯」と同義の語として通用することは、後漢時代の急就篇に「長樂無極老復丁」とあり、又文選の

中にある答蘇武書に「丁年奉使」とあつて、其注に「謂丁壯之年也」とあるによつて證明される。「壯」といふ語が果して釋名の説の如く、「丁」の語原であるか否かは尙疑問が有るであらうが、それは十干の「丁」が丁壯の意義を有して居たところの「丁」といふ語から導かれたことを決定するに對して直接に關係することではない。

「丁」の字は「成」の字の中に含まれて其の音標的部分を爲し、「成」の字からして「盛」の字が造られて居り、此三語は又語原的方面から見ても密接なる關係を保つて居るものである。説文に「丁」の字を解して、「夏時萬物皆丁壯成實（徐鍇の本による）とあり、漢書律歷志に「大成於丁」とあるのは此種の關係を認めて居るものである。

「丁」は「丙」と違つて火と直接の緣故の有る語ではないが、「丙」が炳然著見の意を有し、「丁」が丁壯成實の意を有して居ることは、兩者相並んで萬物繁盛の状態を示すに最も適當して居るのである。萬物の繁盛は即ち五行の「火」が君臨して居る状態である。そして「丙」には外部に向つて著見する意があり、「丁」は内部に向つて充實する意が有るから、「丙」は自ら剛であり、「丁」は自ら柔であつて、命名の意匠の上にも剛日と柔日との對偶が充分に注意されて居ると考へることが出来る。然るときは、史記の解釋の中に別に牽強附會の跡が見出し得られないのである。

「戊」と「己」とに對する解釋は史記に缺けて居るが、釋名には出て居る。「甲」「乙」「丙」「丁」に對する解釋が釋名と史記とに於て一致して居ることは既に認められたのであるから、「戊」と「己」とに對す

る釋名の説を以て、大體に於て、古來の説を傳承して居るものと見做して、此の研究を進めようと思ふ。

戊(mou⁴)茂(mao⁴)也。物皆茂盛也。

これは「戊」の語原を「茂」とするものである。然るときは「戊」の字は「茂」の字の省略された形と見ることゝなる。漢書律歷志にも「豊楸於戊」とあつて、楸は茂と同音同義の字である。白虎通にも「戊者茂也」とあつて、釋名の説と同一である。五行の「土」は呂氏春秋に於ても禮記の月令に於ても、淮南子の時則訓に於ても、皆「火」と「金」との中間、即ち夏と秋との中間に置かれて居るから、夏に相當した「丙」と「丁」との次に茂盛の意義を有する「戊」を置いたことは決して不自然なことではない。又天の星座を四方に配當する時には、東宮南宮中宮西宮北宮の順序を取つて、中宮をば南宮の後に附けて置くことも、同様の考案から起つて居るものである。

己(chi²)紀(chi²)也。皆有定形可紀識也。

これは「己」の語原を「紀」とするものである。然るときは「己」の字は「紀」の字の省略せられた形と見ることとなる。「紀」は説文に「別絲也」とあつて、絲の筋を區別すること、即ち「すぢ」を立てることである。此場合に當てゝ見れば、萬物個々の形體が皆成熟充實して、其區別が判然となり、其系統が整然となつたことを意味するのである。「紀」にはまた「理也」「白虎通」といふ訓もある。これはやはり條理を立てゝ治めることである。漢書律歷志に「理紀於己」とあるのは、「理」と「紀」とを合せたので、條理を立てる意に外ならない。「戊」が外方に向つて展開する意を有す

るに對して、「己」は自己の形體を内方に向つて引締める意を有することはまた其間に剛と柔との關係を認めることが出来るのである。

白虎通には「己者抑屈起」とある。これは、月令に高誘が註したものに「己之言起(己)也。其含秀者抑屈而起」とあるのと併せて考へるべきものである。これは、「己」の語源を「起」とするものであつて、釋名の説とは異つて居る。「起」は「立上ること」である。抑屈せられながら立上るといふことは、やはり自己の形體を引締めて獨立すること、解せられる。「起」は説文に「能立也」とあつて、自己を他と區別して立上ること、解せられ、紀は前に述べた通り、絲の筋を區別することであるから、自他の間を區別して個々の性質を發揮するといふ意味は、「起」と「紀」との兩語に於て共通であると認められる。されば、「己」の語原を「紀」とするも、「起」とするも、其の結果に於ては同一となるのである。

庚から以下の解釋は又皆史記に出て居る。

庚 (Keng) 者言陰氣庚萬物。

釋名には「庚猶更 (Keng) 也。庚堅強貌也。」とある。これは史記の解釋を更に説明するものに見てもよい。「庚」を以て「更」と同義とすることは、白虎通に「庚者物更也」とあり、漢書律歷志に「歛更於庚」とあり、詩緯推度災に「庚者更也」とあるによつて、釋名の一家言ではないことが知られる。「更」の意義は堅く締め着けることである。それは「更」を音符とする文字に「哽」「梗」等が有つて、「哽」は舌がからまつて言語が明晰でないこと、「哽」は食つた骨が咽喉につかへること、「梗」

はふさがることであるのを参考して知ることが出来る。「更」の語に又改めるといふ意義の有るのは、事物が固まつて行きつまつた結果が自ら新しいものを導き出すことゝなるのによつて、其意義を轉じたものであらう。漢書にある「歛更」といふ語は即ち此二つの意義を總括して居るもので、收歛して更改するといふことである。「庚」と「更」とは何れも *kēng* の去聲であつて、同音の語であるから、釋名の説を以て「庚」の語原を「更」と説いたものとしても無理なことはなす。

辛 (*hsin*) 者言萬物之辛生。

釋名には「辛、新 (*hsin*) 也。物初新者皆收成也。」とあり、漢書には「悉新於辛」とあり、白虎通には「辛者陰始成とある。「新」の字は「菜」を音標的部分とするものであり、「菜」の字は又「辛」と「木」との合成字で、「辛」を音標的部分とするものである。然るときは、「新」を以て「辛」の語原とすることは別に故障が無い。「辛」に「新」の意義が有ることは、禮記の郊特性に「郊之用辛也。周之初郊日以至」とあるのに對する鄭玄の註に「用辛日者、凡爲人君、當齊戒自新耳」とあるのによつて窺知される。故に史記に「辛生」と言つてあるのは「新生」の意義として解すべきものであらう。釋名に「物初新者皆收成也」とあるのは、漢書、白虎通の解釋と對比して考へれば、萬物の新になるのは古いものが、皆收歛成熟する結果であるといふ意義であらう。さて以上の解釋によれば、「庚」「辛」なる語は即ち「更」「新」から轉じ來つたのである。此等が五行の「金」と如何なる關係を有するかは、書經の洪範に「金曰從革」とあり、「從革作辛」とあるのに參照して考へることが出来ると思

ふ。「從革」は「從ひあらたまると解して、金屬の性質は鑄型の形に從ひ鍛冶の槌に從つて自由に其の形狀を改められるといふことである。そこに革新更改の意義が含まれて居るのである。又「從革作辛」の「辛」は「味のからきこと」であつて、五行に五味を配した中の一つである。

金に辛味が有るといふことは、洪範の疏に「正義曰。金之在火。別有腥氣。非苦非酸。其味近辛。故辛爲金之氣味。月令秋云。其味辛。其臭腥。是也。」とあるのによつて知られる。然るときは、十干の「辛」には「新」と共に「辛味」の意味も含まれて居るのであらう。味の「辛」は辛苦苦痛の「辛」と其意義相通じ、又新生には辛苦を伴ふものであつて、破壊の苦痛は即ち新生の創造であるから、「辛味」と「新」とは思想上の連絡が有ることを認められる。此の如く考へ來れば、「庚」と「辛」とは五行の「金」と頗る密接なる關係を有する語となるのである。「庚」は陰氣が外部から萬物を梗塞して之を堅く引締めること、「辛」は萬物が自ら辛苦し自ら新しくすることと解釋すれば、外内剛柔の關係は此處にもまた發見せられるのである。

壬 (Yen) 之爲言任 (Yen) 也。言陽氣任養萬物於下也。

これは「妊」を語原として「壬」を説くものである。釋名には「壬、妊 (Yen) 也。陰陽交。物懷妊也」とあり、漢書律歷志には「懷任於壬」とあり、白虎通には「王者陰始任」とある。「妊」と「任」とは相通ずる語であつて、「妊」は「孕むこと」、「任」は「荷物を擔ふこと」である。「任養」といふことは「擔ひ養ふ」と見べきである。「孕むこと」は即ち一種の「擔ふこと」であり、「懷任」は即ち「懷妊」に外ならぬのである。されば、以上の諸書の解釋は畢竟皆同一のことを指して居るものである。これは

陰の極まつて更に陽の萌芽を生ずる状態を象徴する語である。



癸 (Kuei³) 之爲言揆 (K'uei³) 也。言萬物可揆度。

これは「揆」を語原として「癸」を説くものである。釋名には「癸揆也。揆度而生乃出之也」とあり、漢書律歷志には「陳揆於癸」とあり、白虎通には「癸者揆度也」とあり、廣雅には「癸揆也」とあり、禮記の月令の註には「壬」と「癸」とを合せて「壬之爲言任也。癸之爲言揆也。時萬物懷任於下。揆然萌芽」とある。何れの説も皆「揆」によつて「癸」を解して居る。「揆」は「度」と同義で「はかる」といふことである。されば「癸」は即ち内部に孕まれ抱かれて居る萌芽の形狀が具備して稍其長さを度り得べき程になつたことを示す語と解することが出来る。此の如く考へれば、「壬」「癸」は既に成熟して更に新しいものを造り出すべき機運に到達した萬物が、其衰頽潰滅し行く裏面に、新しき萌芽を伏藏せしめて、其の形狀が稍成立し始めて居る過程を指示して居るものとなるのである。「甲乙」が春に當り、「丙丁」が夏に當り、「庚辛」が秋に當るものとすれば、「壬」「癸」は即ち冬に當る。五行に於ては「水」であつて、萬物の形狀の最も廢頽した境地である。「壬」は陰氣が外からして萬物の萌芽を懷抱することを指すのであり、「癸」は萬物の萌芽が内から其の形體を成立させて行くことを指すのであるから、外内剛柔の對比は此處にもまた現はされて居るのである。

十干の名稱を史記と釋名とによつて語原的に説明すれば、五行説を豫想して考へる時に、殆ど無理と認むべきものはない。しかし十干の名稱の研究は此れのみにてはまだ不完全

である。それは支那文字が象形的分子に富んで居る以上、文字の方面からも一應の検査を試みなければならぬからである。自分は此種の研究をするに當つて、語原的方面から見ることを主要なものとして、字原的方面から見ること、を附帶的なものとする。支那學に指を染める人は往々言語と文字とを混同する癖が有る。それは支那語が單綴語を基礎として居て、一個の單綴語が一個の文字で表示されて居り、言語と文字とが密着して居るから、或る點に於て止むを得ざる事でもあるが、文字の任務は言語を寫すのであり、言語は文字に先つて存在すべき筈であるから、文字を主として言語を説かうとすることは大なる錯誤でなければならぬ。文字の構造については後漢の許慎の著した説文解字が第一の典據であるから、先づ其の記述を主なるものとして論ずることゝしよう。

甲 從木戴孚甲之象。

これは「甲」の字の小篆によつて、を木の實の皮殻の象形とし、を木の萌芽の象形とするのであつて、語原の研究によつて得たところの意義を殆ど其儘に形に示して居るものである。鐘鼎古文と龜甲獸骨文とは十十などに作つてあるが、これらもまた左右に出て居る線を以て皮殻を示し、上方に出て居る部分を以て皮殻を破つて出た萌芽を示して居るものと解すべきであらう。史記では「甲」の意義を「萬物剖符甲而出也」と解してあるが、古文の方は一層それに近い形を示して居るのである。

て 象春艸宛曲而出。

これは「乙」の字の小篆によつて、草木の嫩い芽がまだ屈曲して居る所を象つたものとしたのである。この解説も史記に「乙」の語原を説いて「萬物生軋軋」と言つてあるのに一致して居る。そして此の場合に於ては「乙」が「軋」の本字であつて、「乙」なる文字の意匠の中に既に「軋」の意義が含まれて居るのである。鐘鼎古文も龜甲獸骨文も皆同一である。

丙 陰氣初起。陽氣將虧。从「一」入「冂」。一者陽也。






これは「丙」の字を以て、「一」と「冂」との合成とし、「一」を以て陽に象り、陽氣が或る被覆の中に入らうとすることを示して居るものと解釋するのである。しかし、此の解釋は陰陽思想の臭味を帯びて居て、頗る煩瑣に過ぎた感が有る。干支は假令陰陽五行思想の産物であるとしても、それを記す文字は必ずしも陰陽五行思想の産物ではない。象形文字は極めて原始的なものであるから、哲學的思索が成立しない以前に於て發生することは可能である。それ故に説文の解釋は直に信憑することが出来ない。鐘鼎古文の中には「冂」内「丙」の如く作つたものも有る。龜甲獸骨文にも亦「冂」内などに作つて居る。此等は明に説文に依ることの出来ないものである。

清の朱駿聲は説文通訓定聲を著して、音標的部分を主として許慎の書の排列を變更し、一の文字の下に多くの價值ある解説を施した。特に其れが十干十二支の文字を解するに當つて執つた所の態度は正當である。其れは陰陽五行説の臭味を離れて此等の文字の意匠を説かうとするのである。「壬」の字の條に記した朱氏の意見は次の如くである。

嘗謂說文解字一書功不在禹下。惟幹枝二十二字。許君因仍舊說。膠據緯書。類皆穿鑿傳會。然其別附於五百四十部之末。意仍有未安也。倘得有考文之責者。盍而正之。庶叔重歷劫不磨之書。不至以小疵累大醇云。按幹枝字各有本義。古用以紀旬。取爲表識云爾。正如算家萬億正載溝澗。借以紀數。非因紀數而特製其字也。後爲借義所專。遂至昧其本訓。

朱駿聲は「丙」の字の構造について「丙。裁也。古文作災。从火。燒。丙。會意。說文以爲裁之或體。誤。丙亦古文也。火炎上。从古文上省。與帝旁同意。類似的意匠といふこと。从古文灾省。非丙字。……魚尾似丙。而小篆亦作火也」と論じて居る。これは「丙」の字を「一」と「丙」との二部に分ち、「一」を「上」の字の省略されたものとし、「丙」を以て火炎の燃え上る貌とし、多くの例證によつて「丙」の字と「火」の字とが其形に於て極めて近接して居ることを述べたのである。此説は古文の形と並べて見る時に益、其妥當なるを感ぜしめるものである。然るときは釋名に「丙」を解して、萬物炳然皆著見也」としてあるのが、直に文字の製作の意匠にも適用されることゝなるのである。そして「丙」が寧ろ「炳」の本字となり、「炳」の字の火扁は「丙」の字が種々なる語の音符として用ひられる様になつた後に、區別の必要上、更に添加されたものと見るべきである。

个 夏時萬物皆丁壯成實象形。

これは「丁」の字を説くのである。此の解釋も聊か肯綮に當つて居ない様である。說文通訓定聲には「丁。鐙也。象形。今俗以釘爲之。其質用金。或竹或木。」と述べて居るが、それは此字を以て釘の象形を取つたものとするのである。鐘鼎古文には、     等に作つてあり、龜甲獸骨

文にも口◇○などに作つてあるが、これを釘の象形とすれば容易く説明が出来る。釘を打込めば確實に物を固定するのであるから、釘は萬物の丁壯なる状態を形容するに極めて適切な語である。「釘」はそれを打込む音から出た擬聲語であらう。詩經に「伐木丁丁」椽之丁丁」などの句が見えて、木を伐る音や杭を打つ音を形容して居る。此の「丁」は今は cheng と讀まれて居るが、本來は丁壯の「丁」等の音と格段の區別は無かつたものと思ふ。それ故に、丁壯の意義ある「丁」の語原は、或は釋名の言ふ如き「壯」ではなく、寧ろ此の「釘」であつたかとも推測される。十干の「丁」の語原が丁壯の「丁」であり、丁壯の「丁」の語原が釘であるとすれば、十干の「丁」なる語を此字で示すことは、單に其音を借用したのみでなく、意義の上からも充分なる連絡があるのである。

戊 象六甲五龍相拘絞也。

これは「戊」の字を説くのである。六甲とは十干十二支を組合せた六十甲子のことである。それと五つの龍とがからまつた象形として此字を説くのは、これも容易に首肯し難い。畢竟陰陽思想に拘はれた煩瑣な解釋であつて、造字の本意には合して居ないものであらう。鐘鼎古文にあるものも大體之と同一であるが、左側の線を太くした戊などの様なものである。龜甲獸骨文も亦戊である。此字は「戈」の字形に最も類似して居るものであるから、戈の類の形として説くのが適當である。説文通訓定聲には之を「矛」字の別體として解釋して居る。「矛」(mou)と「戊」(mou)とは其音が近似して居るから、もとは同一語であつたと考へて

も差支はない。「矛」は兵車の上に建てるどころの二丈の長さのある槍であるから、此種の武器の中では特に豊美盛大なるものである。「戊」を音標的部分として居る「茂」の字にもまた豊盛の意義が有る。それ故に「戊」といふ文字は「大なる槍」立派なる槍などの意義を含めて造られた象形であらうと思はれる。然るときは、釋名の語原的説明に於て、十干の「戊」を以て萬物茂盛の状態を標示する爲に「茂」から導かれた語としたのは、造字の意匠から見た「戊」の意義とも連絡を生ずることゝなるのである。

「戊」といふ字は、最初文字の少なかつた時代には、單に大なる槍を示すのみならず、之と同音若くは類似の音を有する種々なる語を記す爲にも借用せられたものであらう。それが漸く意義の區別を文字の上にも明示する必要を生じた時、「しげる」といふ意義を有する語を示す場合には、それに「艸」を冠して「茂」の字を造り出したのであらう。十干の考案された時代に於て、既に「茂」といふ語に對して「茂」の字が造られて居たとすれば、「茂」といふ語を以て十干の「戊」の語原と見ようとする爲には、十干の「戊」の字は「茂」の字の再び省略せられた形として説明せねばならぬ。若し單に文字を主としてのみ論ずるならば、「戊」の字が先に在つて、「茂」の字が後に出來たことは明白である。これが語原的説明と字原的説明との相違であつて、又字原を以て語原と同一視することの不可なることを證明するものである。しかしながら若し十干の製作された時にまだ「茂」の字が出來て居ないで、「戊」の字が「茂」なる語を記す場合にも使用せられて居たとすれば、十干の「戊」の字は本來の「戊」の字を直に適用したものと見ることが出

來るのである。「戊」と「矛」とが本來同一物の象形文字であるといふことは「茂」と「楸」との比較によつても推測される。「茂」は「艸」と「戊」との合成字であり、「楸」は「林」と「矛」との合成字であつて、此兩字は同音同義であり、「艸」と「林」とは意義に於て相類し、「戊」と「矛」とは音及び意義に於て同一である。此等は互に代用されたものと認められる。「楸」は「茂」の古字といふ説も有る。

ㄨ 象萬物辟藏誦形也。三古文己如此。

これは「己」を説くものである。「辟」は「避」であり、「誦」は「屈」である。此の解釋は白虎通に「己者抑屈起」とあるのに關係して居るものと思はれるが、抑屈の形と見るのは妥當でない。これも説文通訓定聲に「按己即紀之本字。古文象別絲之形。三横二縱。絲相別也。小篆象古文之形。左右誤連」と論じて居るのが勝れて居る。鐘鼎古文にも龜甲獸骨文にも己Sなどの形になつて居て、直線的であるから、説文にある古文に一致して居る。然るときは又釋名の語原的説明とも相照應することゝなつて、「己」は寧ろ「紀」の本字と見るべきものとなるのである。

𠄎 象秋時萬物庚庚有實也。

これは「庚」を説くものである。此の説明だけでは、此の文字を何の形に取扱つて居るかが明でない。清の阮元の積古齋鐘鼎彝器款識には「庚鞮」と名づけた銅器の銘にある庚の字を説明して、此庚字……有庚庚垂實之象。不觀此文。安識叔重許慎の字説文之義乎。と言つて居る。それは上方と兩側とにある彈丸状のものを以て果實の象形と見たのであらう。許慎の説も或は阮元の推定した通り左右兩側に垂れた曲線を以て果實の垂下して居る形とし

たのかも知れぬ。鐘鼎古文は種々の形に書かれて居て、上記の外に鬲、鼎、簋などが有る。龜甲獸骨文も亦大同小異である。説文通訓定聲には、庚、絡絲柎也。易謂之欄。从干。象柎形。又手絡之。會意」と説いて居る。絡絲柎とは、絲卷の棒である。釋名に言つてある様に、庚を「更」と同義と見て、それを堅強の貌と解すれば、絲を絡むことはそれを締めつけて堅強にすることであるから、此説は穩當である。自分は尙料を以て左右の手と見るよりも、寧ろ絲が卷着けられて其兩端が垂れて居る貌と見た方が宜しからうと思ふ。此の如く考へ來れば、鐘鼎古文の方をも一貫して説明が出来よう。「庚」の字は本來「更」の意義を指示し得べき性質を具へて居るものである。

辛 秋時萬物成而熟。金剛味辛。辛痛即泣出。从一从辛。辛罪也。

これは「辛」を説くものである。「辛」は「愆」と同字で、罪といふことである。「一」に従ふといふことは其意味が明でない。清の段玉裁の説文解字注には、「从一从辛」に注して、「一者陽也。陽入於辛。謂之愆陽。」とあるが、此の解釋も煩瑣である。説文通訓定聲には、「辛、大罪也。从羊上。會意」とある。これは「辛」の字を分析して、「上」古文「二」と「羊」との二字としたのであつて、「羊」は説文に「擷也」と訓じて、「刺す」といふことであり、「搯」と同字である。これは軽い罪である。説文通訓定聲の説では、此の軽い罪を示す文字は「二」と「入」の倒なのとの合成字で、「刺す」ことを象徴したものであり、此の字の上に更に「上」の字を加へて、「辛」の字を作り、それで重い罪を示すと見るのである。そして又「干」と「羊」とを比較して、「干」は「一」と「倒入」、「羊」は「二」と「倒入」で、「干」の「犯す」は「羊」の「刺す」よりも

一段軽いと言つて居る。鐘鼎古文にあるものも辛辛などであり、龜甲獸骨文も辛辛などであつて、大抵同形である。そこで自分はやはり後の解を勝つて居ると思ふ。しかしそれは、直に罪を示すと見るよりも、寧ろ肉體的の辛苦苦痛を象徴して居るものと見る方が一層宜しからう。辛苦の意味を示す文字に此の如き意匠を用ひたのは興味の有ることである。物の味の辛いのも、肉體的に一種の辛苦を與へるものであつて、精神的辛苦の「辛」は肉體的辛苦の「辛」を其の語原とするものであらう。又「辛」と「新」との間にも破壊と創造との關係によつて思想上の連絡が有ることは、前に語原を論じた時に述べて置いた通りである。

史記釋名の語原的解釋に於ては、十干の「辛」なる語を「新」から出たものとして居る。それも理由のあることである。此の如く見る時は、十干の「辛」の字は「新」即ち「辛」「木」「斤」の合成字の略體とせねばならぬ。しかし文字の構造から言へば、「辛」が元であつて、それに「木」と「斤」とが加はつたのである。茲にもまた語原論と字原論との混雜が伴ふのである。尤も、十干の「辛」に「か」と「あたらしい」との兩義が籠つて居るものと見れば、此の混雜は一掃される。

壬 象人懷妊之形、與巫同意。

これは「壬」の字を以て懷妊の形を示すものと説くので、中央の横線は即ち胎兒の所在を示したものとするのである。鐘鼎古文には「壬」に作つて居るものもある。中央の彈丸狀をして居るのは之と同一の意味に解せらるべきものである。龜甲獸骨文は「工」に作つて居るが、それは略體と見るべきであらう。しかし説文通訓定聲では別の解を施して、「壬、偕何也。上下

物也。中象人僂之。……凡經傳皆以任爲之。と言つて居る。此の説は「壬」の字の上下にある點を以て物の形を示すものとし、縦の線を以て物を擔ふ所の棒とし、中央の横線を以て擔ふ所の人を指して居るとするのである。そして經傳に於ては普通之人扁を附して「任」の字として使用して居るものと説くのである。此の場合に於ても、通訓定聲の説が勝れて居る。懷妊もまた一種の荷物を擔ふのである。史記釋名の語原論は懷妊に由つて説を爲して居るのであるから、許慎朱駿聲の兩説皆善く通ずるのである。

𠄎 象水從四方流入地中之形。

「癸」の字に對する此の解説も要を得て居ない。朱駿聲は「癸、兵也。象形。按即戣字。三鋒矛也。因爲借義所專。復加戈傍」と解いて居る。これは三鋒の矛の象形として、それを「戣」字の本字と見るものである。鐘鼎古文には𠄎、𠄎、𠄎などが有る。最後のものが三鋒の矛の形と見るに最も近い。此の場合に於ても朱駿聲の説が勝れて居るのである。龜甲獸骨文もやはり𠄎、𠄎などである。史記釋名の語原論からすれば、十干の「癸」は「揆」に本づいて居るのである。「揆」は「か」といふことであるが、「はかる」と三鋒の矛との間に意義の上からの連絡が有るか無いかは容易に判斷することが出来ない。「揆」の字に含まれる「癸」はただ音標の用のみを爲すものかも知れぬ。従つて十干の「癸」の字もまた單に音標として用ひられて居るのかも知れぬ。

許慎は又十干の字形を説くに當り、大一經といふ書にある別説を附記して、「甲」は人頭に象り、「乙」は人頸に象り、「丙」は人肩に象り、「丁」は人心に象り、「戊」は人脅に象り、「己」は人腹に象り、「庚」は

人臍に象り、辛は入股に象り、壬は人脛に象り、癸は人足に象るものとし、十干が考案された後に人の身體の各部に象つて文字を製作したものと見て居るが、これは極めて牽強附會なる説であつて、朱駿聲が之を評して、至大_一經以十_二幹字_三聯屬爲_四一大人形_五直小兒語矣_六と罵倒して居るのは正當である。

史記の律書にある記述を主要なる根據とし、釋名、說文等を參酌して試みたところの十干の名稱に對する語原的並に字原的研究は茲に終つた。此の兩方面から得た結果は善く調和して居て、史記にある解説は大體に於て自然的であつて妥當性を帯びて居る。史記以前の古書には何も見當らないが、自分は此の理由を以て、史記の説が即ち大體に於て古來傳承のものであらうと想像するのである。此の結果によつて、五行説が十干の本質の中に深く浸透して居ることが益々明瞭となり、十干と五行説とは決して分離して考ふべからざるものであることが益々確實となつて來たのである。從來五行説から分離して十干を解釋しようとして企てた一二の學者(新城新藏博士、梁啓超氏、Laouperie氏の如き)は有つたが、其れ等の人々はまだ實際には何等の解釋にも成功して居ない。自分が考へる所では、五行説を豫想してこそ始めて十干の解釋が成立するのであつて、五行説を離れては、決して何等の解釋をも爲し得ないのである。後漢の蔡邕が、探五行之情、作甲乙以名日_一と言つたのは誠に其の要領を得て居ることと思ふ。(未完)